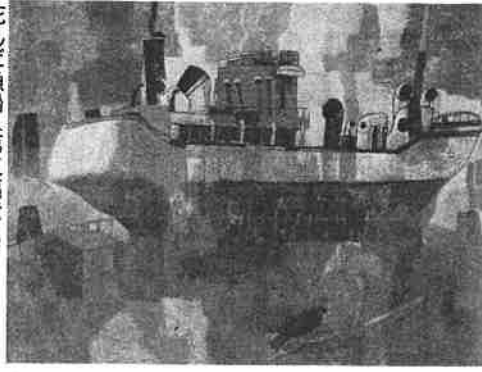


### 寺田政明の画業を回顧して

菊地明子

寺田政明は明治四五年福岡県八幡市に生まれた。主体美術協会の創立会員の一人である。昭和三年、一六才で上京し、太平洋美術学校で学んだ。昭和七年第二回独立美術協会展に初入選、同一二年には第七回独立展で協会賞を受賞。この間NOVA展へ出品し、仲間と共に「エコルド・東京」「前へ展」を開催、「池袋美術家クラブ」を結成するなど意欲的に制作と取り組んだ。これが氏の画業の最初である。



死んだ漁船(第五福竜丸) 一九七五年

氏の画業を、私は一種の(幻想派)であると思っている。(幻想派)と言っても、氏の場合、現実からかけ離れた夢や絵そら事を描いているのではなく、人間の深層心理に潜んでいる不安や恐れなどの感じを暗示的な形で表現したり、擬人化した岩や木や鳥や虫などの姿を通して現実社会のリアルな姿を語り、現象の奥に横たわる「真相」を描こうとしているのである。たとえば昭和十三年から三年ほどの間に氏は「芽」という作品を幾つか描いている。この「芽」は現実にはない不思議な形をした不気味な存在で、不吉な予感を孕んだ新芽がそこからニョキニョキと顔をのぞかせ、今にも悪いことが起りそうな兆しを思わせる。昭和十三年という、丁度日米開戦の前夜で、軍国主義の一層の高揚、帝国主義による植民地支配の強化と相俟って、平和を求め変革を希う市民の思想や芸術を圧殺し、表現や発言の自由を奪い、体制はまさにファシズムの正体を現わし始めていた時期であった。

このように氏の作品は現実の状況と民族の置かれてある真の姿を適確にとらえて、幻想の世界を通して暗示的に表現するという方法で、われわれを物ごとの神秘的で本質的な部分へと誘い込んでくれるのである。私が氏の画業をとらえて(幻想派)と称ぶのは、こういう意味においてである。また戦後に描かれた「水中の幻妖」(一九五七)は、海底に潜み、歯をむき出して怪奇なイキモノが描かれているが、折しもアメリカの原子力潜水艦の日本への寄港が論議をよんだ時期と符合する制作である。そして「死んだ漁船」(一九七五)はまさに第五福竜丸そのものを描いた作品である。しかしただのスケッチでないことはマストや煙突や窓の一つ一つの形をみるとわかるであろう。それらは眼を見開き意志を持ってわれわれに語りかけてくる。恐らくは「核兵器許すまじ」と。

展示館の拡充、展示内容の充実を——協合理事会開く  
七月十七日、協会の第八九回理事会在が学士会館でひらかれ、①展示館の修理・拡充②展示館の展示内容の充実を中心に審議しました。修理と拡充については、大谷研究室、杉設計建築事務所より提起された調査報告書と、南部公園緑地事務所に説明・要請をおこなった経緯が報告され、実現のために一層の努力をすることが決定されました。また、展示内容の充実については、視覚に訴える実物品の重視、写真・図版パネルの大型化、解説文の簡素化を中心に印象深いものにする事、小川理事を担当事者にして展示計画をたて理事会にはかることを決定しました。

修理・拡充を都に要請  
展示館の修理・拡充について、七月十四日、八月一日の両日、川崎、猿橋理事が東京都南部公園緑地事務所を訪問、善処を要請しました。

松山義夫元副会長を偲ぶ  
七月二十九日、学士会館で「松山先生を偲ぶ会」(東大農学部水産学科など主催)が開かれました。会には三宅会長、本多副会長、猿橋理事が出席しました。

### 今年の八月に思うこと

秋葉 忠利

今、広島を起点として全国的に、いや世界的に原爆ドームを修復して後世に残す運動が進んでいる。これはとても大切な運動だと思う。それは、写真を見、被爆者の体験記を読み、映画を見ることで原爆の恐ろしさはある程度分っても、広島に来て初めて分る事が多いからである。色があせ始めたといえ、被爆当時、中学生が着ていた制服を目の前に見ることによって初めて伝わることもまた多いのである。それは、広島に立つことが、空間的には三次元の経験であり、人間の持つ五感(ことによると六感以上かも知れないが……)全てに働きかける経験だからかも知れない。

そして、人間には百年程で訪れる死も、建物等の「物」にはもっとゆっくり巡ってくる。第二次世界大戦をある程度知っている私達の世代がいなくなる数十年後、その記憶をとどめる「物」が、私達の代りに「発言」してくれる。そのためには、出来るだけ多くの、そして多様な「データ」、「証人」を後世に残す必要がある。個人の日記、手紙、体験記、当時の服、写真、その他何でも保存することが先ず第一である。必要がなくなれば、あるいは資料としての価値がないものなら、捨てることはいつでも出来る。しかし、一度捨ててしまったものを創り出すことは不可能なのである。原爆ドームだけでなく、その他の被爆した建物、様々な資料の保存と収集が、今、急務になっ

ている。資料は、日本だけではなく、アメリカにも多くある。被爆直後の広島・長崎に入ってきた多くのアメリカ人が(その他の連合国軍の兵士達も)種々の資料を持ち帰っているからである。それと同時に大切なのは、被爆体験の「整理」と「思想化」である。長い間アメリカに生活して感じたのは、被爆体験が表面的には伝っても、しばしば、真のメッセージがどこかで消えてしまう不思議さである。被爆体験には同情を示しても、「核は廃絶されなくてはならない」という部分はいとも簡単に無視してしまうのが、圧倒的多数の人々の反応なのである。(勿論、被爆体験そのものに拒否反応を示す人も多い)これらの人々は、被爆体験をどう解釈すべきなのかについて、自分こそ最終的な判断をして当然だ、と意識的に、あるいは暗黙裡に考えている。

最終的には、異文化をどう解釈すべきなのか、他人の経験に対して自分はどういう態度を取るべきなのか、という問題に突き当たるが、その点も含めて、異文化に属する人々……現在の日本人と比較して、今から数世紀後の日本人でさえ、異文化に属する人々だと考えるべきだと思……に説得力を持つ「思想化」がどうしても必要だ、と今考えている。

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2  
都立・第五福竜丸展示館内  
電話 (521) 8494

四半世紀前、私が初めて広島を訪れた際の衝撃が、まさにこの種の物であった。また、数年前、初めて第五福竜丸の実物を見て、ビキニ被爆の意味、そしてその大きさが分ったのもそのせいである。

歴史的な「データ」には、それ以上の意味もある。それは、私達誰しもが、各々に自己中心的な世界観を持っているからである。その世界観に従って、私達は自分達の頭の中に「歴史」を再構成する。その「歴史」が、しばしば身勝手な物、自分には甘く他人には厳

資料の保存と収集が、今、急務になっ

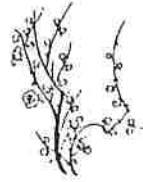
今、広島を起点として全国的に、いや世界的に原爆ドームを修復して後世に残す運動が進んでいる。これはとても大切な運動だと思う。それは、写真を見、被爆者の体験記を読み、映画を見ることで原爆の恐ろしさはある程度分っても、広島に来て初めて分る事が多いからである。色があせ始めたといえ、被爆当時、中学生が着ていた制服を目の前に見ることによって初めて伝わることもまた多いのである。それは、広島に立つことが、空間的には三次元の経験であり、人間の持つ五感(ことによると六感以上かも知れないが……)全てに働きかける経験だからかも知れない。

最終的には、異文化をどう解釈すべきなのか、他人の経験に対して自分はどういう態度を取るべきなのか、という問題に突き当たるが、その点も含めて、異文化に属する人々……現在の日本人と比較して、今から数世紀後の日本人でさえ、異文化に属する人々だと考えるべきだと思……に説得力を持つ「思想化」がどうしても必要だ、と今考えている。

(広島修道大学人文学部教授)

### 平和随想 (31)

三宅 泰 雄



一九五四年三月におきた第五福竜丸のビキニ水爆被災事件の結果その翌年の八月に、はじめて広島で「原水爆禁止世界大会」が開かれたことについては、これまでもしばしば書いてきました。

ここでは、この運動の中心人物であった、安井郁さんのことなどについて、思い出を書いておきたいと思えます。

そのころ安井さんは、法政大学の教授で国際法を教えていました。一九五二年からは杉並区立図書館長を兼任され、さらにその翌年からは杉並区公民館長をも兼ねていました。

公民館では、婦人を中心とする読書会(杉の子会)を主宰し、古典の勉強を助けていました。たま

たま、「杉の子会」が始まった翌年にビキニ事件が発生しました。その結果として、原水爆に対する国民の怒りが爆発し、各地で原水爆運動がはじまりました。

安井さんは、早くも、この運動を組織化し、大衆化することの重要性に着目しました。そして、その年の五月から「杉の子会」を中心に「水爆禁止署名運動杉並協議会」を発足させ、主として婦人の活動によって、またたく間に、区民の七〇％をこえる署名を集めました。この運動は八月には、さらに「原水爆禁止署名運動全国協議会」に発展し、安井さん自身が事務局長の役を引き受けました。

この運動への同調者の数は全国に拡がり、三千万以上もの署名が集まりました。

この民衆の力を背景に、はじめて原水爆禁止世界大会が開かれ、ついで「原水爆禁止日本協議会」(原水協)が結成されました。安井さんは、その事務総長(のち理事長)に任ぜられました。

安井さんは名だたる雄弁家で、統率力も抜群でしたから、運動の指導者として、最もふさわしい人でした。その後、一九五八年に、

安井さんは平和運動への功労者として、ソ連政府からレーニン賞を授与されています。

しかし、一九六三年ごろから、社会党系と共産党系の構成員の間で、政治や世界情勢等に対する意見の相違から、せつかくの世界大会も分裂するに至りました。その直後に、安井さんと私は、NHKのラジオ放送で、運動の分裂について対談し、お互いに遺憾の意を表明せざるをえませんでした。

安井さんのお宅は私の家の近くであったため、通勤の途上等でいろいろと雑談をかわすなど、相互に親しい仲でした。しかし、その当時、私は安井さんが戦時中、大東亜共栄圏を支持したことを非難され、東大教授から追放されていたことについては、全く知りませんでした。追放の当時、安井さんはつぎのように述べています。

「東亜に対する日本の立場は、宿命的に、東亜解放と東亜侵略の二重性を有している。東亜解放を理念として学問的に樹立しようとして試みたその方向における努力が、所期の結果を収め得なかったが、それが軍国主義の烙印を押された。私は安井さんが、戦時中は大東

亜共栄圏を支持し、戦後は原水爆禁止の平和運動に、並々ならぬ献身をされた、その思想遍歴のあとを知りたいと思いました。原水爆禁止運動の先駆者の一人でもある吉田嘉清さんたちとも話し合っただけですが、いまのところ、まだはっきりとした解答は出ていません。

それはそれとして、初期の原水爆運動の創始と、その国内的・国際的への発展は、安井さんにおいては、全く不可能に近いことでした。

最近のニュースで、杉並公民館跡に、原水爆運動の発祥の地として、記念碑の建設が区議会会で決議されたことを知りました。

これには安井田鶴子夫人をはじめ、「杉の子会」の旧会員のご努力によることの大きいことに感謝しています。

初期の原水爆運動の歴史をふりかえるにつけ、今の運動のあり方について、考えないわけにはゆきません。



### 「水爆の父」との対面

永 田 浩 三

水爆の父とよばれる原子核物理学者、エドワード・テラー博士から、インタビューを受けてもよいという返事を受けたのは、アメリカ取材が、残り一週間しかない、五月十二日のことだった。

エドワード・テラーといっても、御存知の方は少ないかもしれないが、彼こそ、第五福竜丸が被災した。あの水素爆弾の発案者である。私たちは何故彼に会おうとしたのか。もちろん私たちは、実験が、彼だけの力で行なわれたのではないことを知っている。しかし、私たちの今回の調査によって、実験の危険性については、大統領も軍司令官もさしたる認識はなく、実験をする強行モニュメントとしてテラー博士らひとにぎりの科学者の意志が強くはたらいっていたことを確信したからである。ビキニの悲劇から三十五年、日本のテレビ界で初めての本格インタビューの前に、私たちは全員肩に力が入っていた。

カリフォルニア州、サンフラン

シスコの郊外にあるスタンフォード大学。緑豊かな並木がづく、広大なキャンパスの中にテラー博士の研究室があった。二人の女性秘書が、笑みをいっばい浮かべて私たちを歓迎してくれた。奥の部屋に通された時、大きなクッキーをパクつきながら、机に足を投げだし、大声で電話をかけている老人がいた。この人がテラー博士であった。インタビューの時間は二時間。インタビューの足立寿美さん(アメリカ在住、精神病理学者)は、質問の準備が早朝までかかったと見えて、はればったい眼をしていて。

しかし、テラー博士は、私たちの意気込みをばかすかのような、雑談を始めてしまった。中国の民主化運動の行方(その時、まさに天安門事件の直前であった)や、日本の敗戦時における阿南陸相の自決の是非といったことに話が及び、あつという間に約束の時間の半分が過ぎてしまった。私たちは、しかたなく、彼の話をさえ

ぎり、本題に入るよう促した。テラー博士は「わかった。ただし条件がある。私の答えは途中でカットすることなく、始めから終りまで全部使うこと、それが条件だ」と厳しい口調で言った。私たちは大意を損なわないことを条件に、編集することを主張、そのことに彼も納得した上でインタビューがようやく始まった。

「広島・長崎では、十万人以上の人間が死んでいる。ビキニでは久保山愛吉さん一人だけしか亡くなっていない(もちろんこれは誤りであるが)筆者)。なのに、世間の反応は、広島・長崎に比べて、ビキニの方がずっと厳しかった。これは全く不合理であり、納得しがたい。」

「我々は、被害を与えようと思つて核実験を行なったのではない、死の灰が降った範囲についても、あくまで、予想を若干上まわった誤差の範囲である」

「死の灰が長期にわたって人体に影響を与えるのは、ナンセンスである。被爆者の中にはガンになるのではないかと想像する人もいるが、私は全くそうは思わない。」三十五年目にして語られる言葉

は、どれも耳を疑うような恐ろしい内容であった。しかし、私は、テラー博士に対してよりも、英語力の乏しさ故に満足に反論できない我が身に対して腹を立てていた。私事にわたって恐縮だが、私の母も広島島の爆心から八〇〇メートルの地点で被災した。そして今日なお後遺症の不安をかかえながら暮している。それを江戸時代であれば、テラー博士と対面する時、白い装束を着て、短刀を片手に：といった物騒なことだっただけか、かねないような緊張があつてしかるべきであった。だが、インタビューが時間切れになった後、私はテラー博士と一緒にっこり記念写真に納まってしまったのである。ああ自分が情けない……。

私の核兵器をテラーにした番組づくりは、まだ始まったばかりである。いつの日か、この無念を番組のかたちで晴らしたいと考えている。

(NHKディレクター) このインタビューは、六月二十八日、NHKテレビ「ドキュメンタリー89」ビキニ・消されぬ記憶」として放映されました(編集部)。